

〈研究ノート〉

義民像の形成・展開に関する試論

― 近世後期における佐倉惣五郎像 ―

鈴木 凜

キーワード

千葉経済大学地域経済博物館 「房総義民伝」 「佐倉惣五郎」 人物像 メディア

要旨

本稿では、千葉経済大学地域経済博物館令和四年度特別展「房総義民伝―義民はいかに語られ、人びとの力になったのか―」（会期…令和四年一月一九日〜令和五年二月四日）の作成にあたって収集・発掘した史料や個別事象をもとに、近世後期における義民像の形成・展開過程と社会的な影響について検討を行う。特別展「房総義民伝」の内容に即して、全国を代表する「義民」として知られる「佐倉惣五郎」を取り上げ、一八世紀半ば以降、伝承、書物・出版、祭祀・信仰、芸能といったさまざまな媒体によって義民・惣五郎像が形作られ、社会へ広まり、人びとの行動や意識に具体的な影響を与える過程を概観的に示すことを目的とする。

はじめに

千葉経済大学地域経済博物館では、令和四年度特別展として、「房総義民伝―義民はいかに語られ、人びとの力になったのか―」を開催した。

房総三国（下総国・上総国・安房国）は、百姓一揆等の発生件数に対する「義民」の数が全国の中でも多いと指摘されている⁽¹⁾。【表1】は房総の「義民」を一覧にしたものである。全国的にも有名な「佐倉惣五郎」をはじめ、「安房三義民」や「最首左右衛門」など、研究史上、古くから知られてきた「義民」も多数存在する⁽²⁾。

「義民」という存在について、近年の研究では、それが歴史的に作られたものであることが明らかにされた。それまで、村役人が村人を代表して將軍や領主に直接訴える「代表越訴型一揆」は、近世前期の百姓一揆の主要な闘争形態として理解されてきた。ところがこの代表越訴型一揆のほとんどが発生当時の史料では確認することができず、後世に作られた「義民」の物語を史料的根拠にしているというのである⁽³⁾。御上おかみを恐れず、一身をなげうって多くの人びとを救う「義民」の物語がある時に作られ、「百姓一揆」への理解やイメージを大きく規定してきたことが明らかになった。

一方、近世社会では百姓の生存が可能となるよう領主は「仁政」を施し、百姓は年貢・諸役を皆済することが責務であるという、領主と民百姓との間の双務的な関係意識が形成されていた。この関係意識に基づいて百姓たちは「御百姓意識」を持ち、自らの生存が脅かされそうになった際、訴願や一揆によって領主に「仁政」を求めた⁽⁴⁾。このような近世社会における領主と民の関係意識とそれに基づく訴願・一揆に関して近年、一八世紀半ばに行き詰まりをみせた仁政的秩序回復のため、領主と民の関係意識を結び直す「百姓一揆物語」が各地で作られ始めたこと⁽⁵⁾、実際の一揆・争論の訴状を教科書にした「目安往来物」による学習が行われ、一揆を起こすための実務能力が蓄

【表1】 房 総 の 義 民 一 覧

義 民	年 代	地 域	騒 動 内 容	同時代史料	墓 ・ 顕 彰 碑
市東明治左衛門	慶長10年(1605)	上総国山辺郡田場村(東金市)	蔵開放、自害	顕彰碑(昭和29年)	
池田三郎左衛門	慶長16年(1611)	上総国学院郡田川村(木更津市)	再検地要求一揆	十五堂(年不詳)、顕彰碑(明治19年)	
森内藏之助ら2名	寛永3年(1626)	上総国長柄郡中原・東浪見村(いすみ市)	漁場争論	祠(文政9年)、顕彰碑(大正14年)	
大田和四郎右衛門	寛永20年(1643)	上総国山辺郡東金町(東金市)	蔵開放、自害		
野里村外記	寛永頃	上総国学院郡野里村(袖ヶ浦市)	水論		
木内豊五郎	正保・承応頃	下総国印旛郡空井村(成田市)	年貢諸役減免一揆	豊五郎父子の墓、顕彰碑(明治26年)	
鈴木庄吉ら3名	明暦2年(1656)	下総国印旛郡空井・小林村(印西市)	村境争論	墓碑(年不詳)、顕彰碑(明治34年)	
長兵衛	明暦3年(1657)	下総国香取郡山倉村(香取市)	年貢減免一揆	念仏塚(年不詳)	
治右衛門	万治元年(1658)	下総国殖生郡西吉倉村(成田市)	取香牧に関する訴願	顕彰碑(明治31年)	
石毛新兵衛ら2名	寛文7年(1667)	下総国香取郡唐徳寺村(旭市)	境界争論	墓(年不詳)	
山田藤右衛門	延宝元年(1673)	上総国学院郡新田村(袖ヶ浦市)	水論・年貢減免訴願	碑(天明8年)、墓碑(文化9年)	
五郎左衛門ら9名	延宝8年(1680)	上総国夷隅郡水沢文・伊保田村(大多喜町)	村境争論	佐養塚(年不詳)、顕彰碑(昭和38年)	
岩野平左衛門	延宝8年(1680)	上総国天羽郡百官村(富津市)	領主苛政に対する諫言	平岩大権現(年不詳)	
小柴三郎左衛門ら7名	天和2年(1682)	安房国安房郡大神宮村(館山市)	年貢減免一揆	供養塔(文化11年)、顕彰碑(昭和50年)	
弥五郎	元禄16年(1703)	下総国相馬郡布施村(柏市)	年貢減免一揆	弥五塚(現存せず)	
秋山角左衛門ら5名	正徳元年(1711)	安房国安房・朝夷郡北条藩領(館山市)	年貢諸役減免一揆	三義民墓(正徳2年)、 顕彰碑(明治43・大正14・昭和34・平成22年)	
山中新左衛門	享保頃	上総国周匝郡白元村(君津市)	年貢諸役減免一揆	地蔵尊(安永6年)、塚(年不詳)	
最首左右衛門	寛延3年(1750)	上総国夷隅郡栗福村(いすみ市)	先規検地要求一揆	墓碑(年不詳)	
忍足左内	明和7年(1770)	安房国平部金谷村地(南房総市)	種別拝借額一揆未遂	顕彰碑(明治31・大正11年)	
長三郎ら4名	天明2年(1782)	下総国葛飾郡船橋村ほか(浦安市)	漁場争論	勝浜記念の碑(天明8年)	
諸岡太右衛門	天明5年(1785)	上総国天羽郡金谷村(富津市)	年貢減免一揆	墓碑(年不詳)	
角田健治	寛政8年(1796)	安房国朝夷郡山戸村(南房総市)	年貢増徴・先納金に反対	墓碑(年不詳)	
石毛三郎左衛門	文化6年(1809)	下総国夷隅郡太田村(旭市)	村方騒動	墓、顕彰碑(明治29年)	
篠崎庄八	文政6年(1823)	下総国千葉郡北生支村地(千葉市)	漁場争論	顕彰碑(昭和29年)	
内藤二右衛門	文政7年(1824)	下総国葛飾郡船橋村ほか(船橋市)	漁場争論	供養大仏、墓碑(年不詳)	
新井衛	不詳	下総国殖生郡一乗田村(多古町)	大会争論		
山田村左近・右近	不詳	上総国夷隅郡山田村(いすみ市)	上総介への直訴	塚(年不詳)	

保坂晋『近世義民年表』(吉川弘文館、2004年)、各自自治体史をもとに作成

えられたことが明らかにされた⁽⁶⁾。書物というメディア（媒体）に着目して、百姓たちの日常的な意識・営みと民衆運動との関係に迫る研究が行われている。こうした研究を踏まえれば、「義民」という存在がいかに形作られ、意味を持ったのか、それを形成する多様な媒体に着目して、丁寧にもといてみる必要があるのではないか。

以上のことから特別展「房総義民伝」では、房総の「義民」たちに光を当て、「義民」の「像」、すなわち「イメージ」に着目して、江戸時代以来、義民像がどのように形作られ、社会へ広まり、近世・近代を生きた人びとの具体的な行動に影響を与えたのか、関連する史資料と共に展示した。

本稿では、展示の作成にあたって収集・発掘した史料や個別事象を相互に関連付け、代表的な「義民」として知られる「佐倉惣五郎」を事例に、近世後期を対象として、義民像の形成・展開過程と社会的な影響について若干の検討を行う。取り上げる個々の論点や素材については今後さらなる検討が必要であるが、本稿では展示の内容に即して、佐倉惣五郎像の形成・展開過程と社会的影響を概観的に示すことを目的とする。

一 一八世紀半ばにおける義民像の形成

1 佐倉惣五郎と一八世紀前半の伝承

佐倉惣五郎は、正保・承応年間（一六四四～五五）、佐倉藩主・堀田正信の苛政に苦しむ百姓を救うため將軍への直訴を決行し、妻と幼い子供四人と共に処刑され、堀田家に祟りをなしたとされる人物である⁽⁷⁾。佐倉惣五郎の「佐倉」は「佐倉藩領の」という意味で、本姓は「木内」である。

惣五郎に関して、かつては実在を疑う見方も存在したが、一揆が起きたとされる頃の名寄帳に「惣五郎」との名前が発見され、現在では実在した人物として考えられている。惣五郎の持高は二六石九斗三升と、居村・公津村（現

成田市)の中でも大きな家であった。

惣五郎に関する伝承や物語の存在は一体いつころから確認できるのだろうか。惣五郎伝承を書き留めた最も古い史料として、『総葉概録』が知られている。これは、中世に佐倉周辺を治めていた千葉氏の歴史を考証的手法に基づいて記したもので、正徳五年(一七一五)、佐倉藩主・稻葉正知の命により藩儒・磯邊昌言が編纂した。『総葉概録』には次のようにある(8)。

堀田氏の城主たりし時、公津村の民総五罪ありて戮せられしが、自ら窶と称し、城主を罵りて死し、時々祟りを現し遂に堀田家を滅す。因て其の霊を祭り一祠を建て総五宮と称す。

ここでの内容は、公津村の「総五」が何らかの罪によって処罰され、祟りをなして堀田家を取り潰したため、祠を建てて祀ったというものである。このように怨霊を恐れ鎮めるために人を神に祀る「御霊信仰」は、古代以来の習俗で、近世には庶民も祭祀の対象となり、和霊や守護神の性格が強まった(9)。一八世紀前半の惣五郎伝承には「御霊信仰」の性格が強くみられる。

なお、実際に堀田正信は、惣五郎の一揆が起きたとされる同じ頃、万治三年(一六六〇)、佐倉へ無断で帰城し、幕政批判の上書を提出したことから所領を没収され、弟の脇坂安政に預けられている(10)。

『総葉概録』と同内容の伝承は、磯邊昌言『佐倉風土記』(享保七年)(11)、渡辺善右衛門『古今佐倉真佐子』(享保一九)延享三年頃(12)にも見られ、江戸時代中頃の一八世紀前半には、惣五郎(「総五」という人物が処罰され、堀田家を祟ったという伝承が佐倉藩領内に存在していたことが確認される。但しこの段階では、怨霊の要素が色濃く、惣五郎が一揆を起こしたという内容や具体的な人物像はまだ形作られていない。

2 堀田家の佐倉藩入封と惣五郎の祭祀

その後、惣五郎像の形成を考える上で重要な出来事が起こる。正信の改易から約九〇年後の延享三年（一七四六）、佐倉藩へ堀田家が再び藩主として入封することになったのである。

藩主・堀田正亮の入封後、江戸の講釈師・馬場文耕が記した『当時珍説要秘録』（宝暦六年）には、「堀田相模守領知佐倉宗吾の宮建立の事」として次のようにある⁽¹³⁾。

堀田家にては大きに恐るゝ事成しに、近来相模守佐倉の城主と成て後、一度在国して、件の宗吾が霊を祭りて、今は結構に宮居を建立して、大佐倉町に宗吾の宮といふ有。佐倉の入口成る故に、所にては口の明神と唱ふ也。近来宝珠院といふ神職を付られしとかや。

文耕によれば、堀田相模守正亮は佐倉藩主となった後、惣五郎の怨霊を恐れ、「宗吾が霊」を祀って「宗吾の宮」を建てた。当地では「口の明神」と呼ばれ、近頃、「宝珠院」の住職が「神職」となったという。

『当時珍説要秘録』は、九代将軍家重治世の將軍から大名に至る逸話集である。時の老中を務めた堀田正亮にまつわる出来事の一つとして「宗吾の宮建立の事」が取り上げられたと考えられるが、一八世紀半ばに、堀田家の佐倉再入封を受け、藩主が惣五郎の怨霊を恐れ、「宗吾の宮」（「口の明神」）に祀ったと語られるようになったのである⁽¹⁴⁾。堀田家の再入封という出来事が惣五郎像形成の重要な契機となったといえる。

正亮が惣五郎を祀ったという口ノ明神は、大佐倉村（現佐倉市）の将門山にあり、歴代の佐倉藩主が社殿の建立・修復を担ってきた神社である⁽¹⁵⁾。堀田正信が承応三年（一六五四）に寄進した石の鳥居が存在し、一八世紀前半の伝承段階から既に、惣五郎を祀る祠が将門山にあると伝えられていた。また、文耕の叙述にもあるように、大佐倉村の宝珠院が「別当」（神社で仏事を行う者）を務めた⁽¹⁶⁾。宝暦三年（一七五三）からは、毎年二月・八月に口ノ明神の祭礼が行われ⁽¹⁷⁾、藩主の名代による初穂料の奉納、相撲や歌舞伎、惣五郎の出身地である公津村

の人びとによる笹踊りが行われた。口ノ明神は、佐倉藩・地域の寺院・民衆が深く関わりを有した神社であった。

3 物語本の成立

右のような祭祀の動きと併せて、一八世紀半ばには『地藏堂通夜物語』『堀田騒動記』といった惣五郎の一揆を描く物語本が成立した⁽¹⁸⁾。この物語本の成立を以て初めて、「七万石余之名主百姓惣代ニ我壺人命を捨ル方外無之……覚悟之上は死ニも必らず悔ル事なし」⁽¹⁹⁾と、藩領百姓の惣代として命をかけて訴える惣五郎の姿が、具体的な言動を伴って描かれ、人びとに受容されたのである。惣五郎像の形成を考える上で見落とせない重要な動向である。

両書の成立時期を具体的にみてみよう。『地藏堂通夜物語』は、大佐倉村にある勝胤寺の地藏堂で、庵主が六十六部の修行者に、口ノ明神に祀られた惣五郎の由来を語り聞かせるという物語である(惣五郎夫婦の怨霊が語るものもある)。作者は不明で、現在確認できる中では安永二年(一七七三)の写本が最も古い⁽²⁰⁾。この『地藏堂通夜物語』の原型と指摘されているのが、『宗五記』である⁽²¹⁾。現存する物語本の中で最も古い、宝暦四年(一七五四)の成立と考えられている。また、『堀田騒動記』は、『地藏堂通夜物語』『宗五記』同様、惣五郎の一揆の経過を記しているが、一揆の起きた年代や惣五郎の出身地、堀田家改易の原因などに不正確な部分が多い。安永八年(一七七九)の写本が確認され⁽²²⁾、宝暦一三年(一七六三)の写本も存在するようである⁽²³⁾。以上を踏まえると、惣五郎の物語本は一八世紀半ばの宝暦〜安永期には成立したものと考えられる。

惣五郎の人物像について『地藏堂通夜物語』では、「当村名主惣五郎、行年四拾八歳、氣質丈夫ニして、常ニ仏神三宝を祈り、上を大切ニ敬ひ奉り、発明頓智生レ、其比惣五郎こそ田舎生とハ不相見、何様浪人ものゝ流の果ならんかと諸人云く、仁品勝れ并の人とハ見ざりける」と述べられる⁽²⁴⁾。下総国印旛郡公津村の名主を務める惣

五郎は、信心深く聡明な人物であることが説かれ、さらには浪人（武士）の血を引く者ではないかと人びとにささやかれるほどであったという。『堀田騒動記』では、惣五郎は平将門の末裔と説明されており、物語本においては、命をかけて藩領の百姓を救った惣五郎の優れた人間性・出自が強調されている。

以上のように、佐倉藩領内に存在した惣五郎の怨霊伝承を背景に、一八世紀半ば、堀田家の再入封という出来事が一つの契機となり、堀田家による惣五郎の祭祀、祭礼の実施、一方では物語本の成立による具体的な言動を伴った惣五郎像の描出という動きが生じた。これらはそれぞれ別個の動きとしてではなく、伝承・祭祀・書物という媒体が連動しながら、惣五郎像が形作られはじめたのである。

二 一八世紀前半における義民像の展開

1 物語本の流布

一八世紀半ばに伝承・祭祀・書物が関わり合いながら形作られはじめた惣五郎像は、その後どのように広まり、変容したのだろうか。ここではまず『地蔵堂通夜物語』『堀田騒動記』の流布についてみてみたい。

惣五郎の物語本は、手書きで写す写本によって百姓から百姓へと流布した。写本には、筆写の経緯や年号、筆写者の情報が記されている場合があり、それらを一つひとつ整理することで、書物の読者に迫ることができる。

こうした読み手の視点から『地蔵堂通夜物語』『堀田騒動記』をみると、『地蔵堂通夜物語』は佐倉藩領内、特に惣五郎出身地の公津村や口ノ明神がある大佐倉村周辺の村役人層を中心に、『堀田騒動記』は佐倉藩領外（下総国・上総国・武蔵国・常陸国等）の村役人層を中心に流布したことが判明する。また、流布範囲が明確に異なる一方、両書は文化・文政期（一八〇四〜三〇）を画期に流布し始めている。一八世紀半ばに成立した惣五郎の物語

本は一九世紀に入って、佐倉藩領や関東周辺地域の人びとに読まれたことがわかる⁽²⁵⁾。

さらに、名古屋の大野屋惣八などの貸本屋による流布も確認され⁽²⁶⁾、幕末には草双紙や切附本などの出版物となり、より一層多くの人びとに惣五郎の物語が受容された⁽²⁷⁾。

このように惣五郎の物語が書物として文字化され、読まれるようになった背景には、江戸時代の書物・出版文化がある。中世までは主に支配者層のものであった読み書き能力が民衆へも下降し、一般の百姓たちも読書によって考え、自己形成した時代が江戸時代であった⁽²⁸⁾。惣五郎の物語本を一揆・訴訟の参照例として読んだと考えられる百姓や⁽²⁹⁾、物語本を読み、惣五郎が書いた訴状はとても立派で常人が書いたとは思えないと述べる百姓がいた⁽³⁰⁾。江戸時代の書物・出版文化を背景とした物語本の広まりが惣五郎像の形成と展開に大きく寄与したといえる。

2 信仰の広まりと神格化の意味の変容

神に祀られた惣五郎は「宗吾信仰」として人びとの信仰を集めた。文化十一年（一八一四）、江戸の隠居僧・十方庵大浄敬順が記した紀行文からは、惣五郎を祀った口ノ明神の祭礼の賑わいがうかがえる⁽³¹⁾。すなわち、毎年二月・八月に口ノ明神祭礼が行われ、そこには佐倉藩領内の百姓一同が足を運び、神楽や角力の見物に群れをなした。藩主も自ら参拝し、叶わぬ時は代参を立て、「国家の守護神と崇め」るほどだった。さらに、口ノ明神の社殿や神具は立派なもので皆を驚かせ、奉納された絵馬は夥しいほどだったともいう。文化期には、佐倉藩の百姓から藩主までもが「宗五明神」を厚く信仰している様子が、他地域から訪れた人物の目に留まるほどであった。

一方、同じ頃から、公津村にある惣五郎の墓所（現宗吾霊堂）も繁栄し始める。文化三年（一八〇六）、佐倉藩は惣五郎の墓碑を建立して東勝寺へ金三〇〇疋を下賜し、回向が実施された⁽³²⁾。以後、文政と天保期（一八一八～四四）にかけて、次第に墓所への参詣者が増加し、休憩小屋や商店が作られたという⁽³³⁾。

惣五郎の墓は、幕末には『成田名所図会（成田参詣記）』（安政五年）に取り上げられている⁽³⁴⁾。そこでは「宗五祠の図」として紹介され、祠の側には休憩小屋と商店のような建物が描かれている。同書ではさらに、成田山新勝寺への参詣ルートの一つとして公津村を通るルートが示されている。実際に、明治二年（一八六九）、成田山新勝寺を参詣した人物はその帰りに「宗吾大明神別当鳴鐘山東勝寺」を訪れている⁽³⁵⁾。墓所の繁栄は、近世後期に盛んになる成田参詣とも密接に関わりながら展開したものと考えられるが、ここでも書物（地誌）が重要な役割を果たしていたことが注目されよう。

さて、以上のように惣五郎を祀る口ノ明神や墓所への参詣が盛んになるにつれ、物語本の叙述に変化が生じた。そもそもは怨霊を鎮めるために神に祀られたとされる惣五郎であったが、天保期（一八三〇～四四）頃から流布し始めた『佐倉宗五郎物語』（『堀田騒動記』の派生本）では、「諸人をすくひ助けによつて後に神体に崇ひ」⁽³⁶⁾と叙述される。多くの人びとを救った功績から神に祀られたとされ、人格化の意味合いが変化しているのである。「皆人拝し奉る」とも述べられており、ここには実際の口ノ明神や墓所の状況が一定程度反映しているものと考えられる。さらに注目すべきことに、弘化期（一八四四～四八）には、惣五郎に祈れば公事訴訟の成功に利益があり、多くの人びとが参拝している、と叙述されるようになるのである（「世の人公事訴訟の事出来する時ハ、此神を祈誓すればいかなる六ヶ敷訴訟事にも叶ふといふ事、別して御取箇筋杯ハ眼の当りに利生有事、世の人の能知る所にして、毎日参詣有事夥し」⁽³⁷⁾）。この点は後で改めて取り上げるが、一九世紀半ばに、神に祀られた惣五郎には公事訴訟の利益があるとの認識が生まれ、書物の本文に明記されるようになったのである。

3 歌舞伎の題材化

嘉永四年（一八五二）、江戸中村座で「東山桜莊子」が上演された。これは惣五郎の一揆を題材にした歌舞伎である。

江戸時代には実在の事件や人名をそのまま芝居にすることが許されなかったため、時代は足利將軍の時代とし、柳亭種彦『修紫田舎源氏』の世界を借りて脚色、惣五郎は浅倉当吾、堀田家は織越家として上演された。

浅倉当吾役を演じたのは四代目市川小団次、脚本は三代目瀬川如臈であった。小団次の口上では「東山桜莊子」上演の経緯が述べられている。それによると、同年の春芝居の石川五右衛門役で大当たりとなった小団次は、秋芝居で何を演じるか悩み、神田明神の神威を蒙ろうと参拜に赴いた。すると、ある日の夢に老翁が出てきて、「我ハ則平親王將門の靈なり、我子孫の下総ニ残りし在、是佐倉の宗吾也、二百年以前万民の爲ニ命を捨るといへども、神と崇められし事ハ、今正二人の知る処也、是へ詣つるならバ当り狂言の端有らん」と告げられ、早速、瀬川如臈と共に「口大明神」を参詣した。さらに公津村の墓所へも訪れ、次の芝居について考えを巡らせたという⁽³⁸⁾。また、小団次と如臈が成田山を訪れ、寺台村（現成田市）の名主家から『地藏堂通夜物語』を借りて脚本を作ったとも伝えられている⁽³⁹⁾。このように歌舞伎「東山桜莊子」の上演は、既に見てきたような、佐倉藩領内における書物の成立・流布、祭礼や信仰の高まりが基盤となって実現されたのである。

上演当時の江戸の様子を記した『藤岡屋日記』によれば、惣五郎の物語は「義民実録」「義民録」と称され、下総・上総の百姓たちは「伊勢大神宮御影参り」のごとく盛り上がりを見せたという。江戸市中に止まらず、下総・上総の百姓たちが熱狂する様子がうかがえる。また、江戸での歌舞伎の評判は、小団次ら役者や各場面を描いた錦絵、歌舞伎のストーリーを元にした草双紙や切附本などの版本を生み出し、書物・出版による惣五郎像の一層の広まりをもたらした⁽⁴⁰⁾。

さらに注目されるのは、「義民」概念の誕生である。実は「義民」という用語が史料上に現れるのは、『藤岡屋日記』の事例（「義民実録」「義民録」）が最初だと指摘されている⁽⁴¹⁾。正義のために命をかけて尽くす民の意味で、赤穂浪士などの「義士」という言葉になぞらえて作られたといい、惣五郎が生きたとされる江戸時代初期ではなく、

幕末に至って「義民」という概念が登場したのである(42)。

幕末の歌舞伎では、盗賊や悪党、義賊などの「はみ出し者」が主人公となった「白浪物」が人気を博し、小団次は「白浪役者」として名を挙げた。「自己」を犠牲にしてまでも代表越訴する名主の義民」を主人公として取り上げた「東山桜莊子」は、この白浪物と一連のものとして位置づけられている(43)。幕末の世相を反映して作られた歌舞伎によって、惣五郎は「義民」として一層多くの人びとに受容されたのである。

以上のように一九世紀前半には、『地藏堂通夜物語』『堀田騒動記』といった書物が佐倉藩領内と関東周辺地域へ流布し、一方では、惣五郎を祀った口ノ明神の祭礼の賑わい、墓所への参詣者の増加という状況が生じた。祭祀・書物という二つの媒体は、信仰・参詣の隆盛が書物に描かれる惣五郎像に変化をもたらしたように、相互に深く関わり合いながら惣五郎像の流布、変容をもたらした。さらに幕末の歌舞伎はこれらが基盤となって実現されたのであり、歌舞伎はまた書物・出版による惣五郎像の一層の広まりをもたらした。このように近世後期を通じて惣五郎像は、伝承、書物・出版、祭祀・信仰、芸能といった「文化」を背景に、それらが相互に影響し合いながら形作られ、広まっていったのである。

三 義民像の社会的影響 — 幕末維新期の民衆運動と惣五郎 —

さて、ここまで「佐倉惣五郎」を事例に、義民像が形成され、社会へ広まる様子をみてきたが、義民像は幕末を生きた人びとの意識や行動のあり方に、どのような影響を与えたのだろうか。ここで改めて、惣五郎が公事訴訟の神様として描かれるようになったことに注目してみたい。

実は、幕末維新期には、惣五郎像が何らかの形で影響を与えた民衆運動が複数確認される。【表2】によれば、

要求の根拠として(①)、騒動の記録化に際して(②)、頭取の思想形成や評価において(④・⑦)、惣五郎像が関係した幕末維新期の百姓一揆・騒動が存在する。

なかでも、安政六年(一八五九)、信濃国で起きた南山一揆(⑤)は、惣五郎像が影響を与えた百姓一揆として研究史上、度々取り上げられてきた。惣代を務めた今田村元庄屋・小木曾猪兵衛は、一揆の結集に際して講談師を真似て惣五郎の物語を語り歩き、地元(③)の寺院に「宗吾大明神」を勧請した。さらには「佐倉宗吾霊神」へも参拝を行ったという(44)。南山一揆の例では、神に祀られた惣五郎を自地域へ勧請し、佐倉藩領へも参拝に向いているのである。このように一揆の成功を願い、公事訴訟の神様とされた惣五郎に祈る事例は他にもみられ(③⑥⑧⑨)、佐倉藩領内や近隣地域に止まらず、信濃国、出羽国、上野国など比較的離れた地域から人びとが参拝に訪れている。また、佐倉藩領の一三歳男子が百姓惣代として藩役人の非道を訴えた歎願(③)では、宝珠院を通じて「宗吾神霊口宮大明神」へ歎願書が捧げられた。ここでは、年寄役の倉次甚太夫をはじめとする藩役人が賄賂を取り非道な政治を行っていることを訴え、役人たちの職務を取り上げるか、一命を取り殺すかと、神の判断を求めている。一揆・訴訟の成功を祈るだけでなく、神に祀られた惣五郎に裁きを求める人びとも現れたのである。歎願書作成の背景については当時の佐倉藩政の実態と併せて今後さらに検討を深めていきたい(45)。

【表2】に挙げた個々の一揆・騒動については、その背景や経過、中心的役割を果たした人物など、なお詳細な検討が必要であるが、幕末維新期には、公事訴訟の神様とされた惣五郎に大願成就のため祈願する人びとが実際に存在したことが指摘できよう。「内憂外患」と言われ、民衆運動が高揚・激化し社会秩序が大きく動揺した幕末維新期に義民像は、百姓一揆や訴訟などによって現実の課題を解決しようとする人びとに求められ、その行動や思想を後押しする「力」となったといえるのではないだろうか。そして本稿での検討を踏まえれば、こうした状況もたらされた背景には、一八世紀半ば以降、伝承、書物・出版、祭祀・信仰、芸能などのさまざまな媒体が相互に影響

【表2】惣五郎像が影響を与えた幕末維新期の民衆運動

嘉永2年 (1849)	<p>下総国佐倉藩領越訴 ※物語本の奥書に風聞として記される。事実としては未確認。 宝田村名主忠右衛門は年貢減免を求めて、小金原での鹿狩りから帰還途中の將軍徳川家慶に越訴。“かつて惣五郎が願った通りの年貢高にしてほしい”と訴える。年貢減免要求の根拠として惣五郎が持ち出される。</p> <p>陸奥国二本松藩領鈴石村騒動 名主の非道な行いを受け、村内の若者たちが領主に名主の交代を求めた騒動。処罰された頭取の父親は後年（安政年間）、騒動を記録としてまとめる際に惣五郎の物語を引用。“たとえ人びとを救っても、処罰され、自家の存続を危ぶませては親不孝だ”と述べ、騒動の教訓化に惣五郎像が活かされる。</p>
嘉永5年 (1852)	<p>下総国佐倉藩領歎願 佐倉藩役人（年寄・郡奉行・代官ら）の非道な行いを訴え、役人の罷免を求めた歎願。13歳の男子が百姓惣代となり、惣五郎を祀る「宗吾神霊口宮大明神」に歎願書を奉納し、「役儀取上ヶ候願、又者一命取殺候哉」と「神慮」による裁きを求めた。</p> <p>常陸国筑波郡上大島村騒動 名主による用水運用・村入用（経費）割合の不正を訴えた村方騒動。訴えの中心となった百姓惣代の清兵衛は、「佐倉記」という書物所持。惣五郎の物語が権威を恐れず名主を訴える清兵衛の支えになった。</p>
安政6年 (1859)	<p>信濃国白河藩領強訴（南山一揆） 藩役人務川忠兵衛による年貢増徴政策に反対した百姓一揆。中心となった元庄屋小木曾猪兵衛は、一揆の結集に際して惣五郎物語を語り歩き、地元の寺院に「宗吾大明神」を勧請。「佐倉宗吾霊神」へも参拝。</p>
文久3年 (1863)	<p>出羽国幕領越訴（文久屋代一揆） 屋代郷の百姓が、幕領から米沢藩領への支配替えに反対した一揆。一揆勢は大願成就のため「下総国宗吾大明神」への参拝を計画（病気により中断）。また一揆記録には「佐倉宗五郎訴状」を参考資料として収録。／本一揆は、当地で語り継がれてきた義民・高梨利右衛門の伝承と訴状が要求の正当性・根拠とされた。</p>
慶応2年 (1866)	<p>陸奥国盛岡藩領強訴 藩役人川村治助の厳しい年貢取立に反対した百姓一揆。頭取小原重兵衛は「佐倉宗五郎の再来」だと皆々から尊ばれ、その行動は「国土人民のため、神の加し」と敬われる。現実の百姓一揆指導者と惣五郎とが重ね合わされる。</p>
明治2年 (1869)	<p>上野国高崎藩領強訴・越訴（五万石騒動） 天候不順による凶作を背景に年貢減免、税法改正を求めた百姓一揆。3人の惣代が、東勝寺の惣五郎霊廟を参拝して大願成就を祈願。さらに祝詞も作成され、神々の中には「佐倉惣吾霊神」の名が列挙される。</p>
明治11年 (1878)	<p>神奈川県大住郡真土村殺害・放火騒動（真土村事件） 地租改正に反対した小作農たちが質主である戸長を殺害し、屋敷に放火した事件。中心となった冠弥右衛門は、自家の敷地内に惣五郎の祠を祀っていたと言われるほどに惣五郎を尊崇。</p>

※千葉経済大学地域経済博物館令和4年度特別展「房総義民伝」にて展示した表を一部改変
※深谷克己監修『百姓一揆事典』（民衆社、2004年）
①鈴木潔「近世後期における「義民物語」の伝播・受容」（『書物・出版と社会変容』25、2020年）
②『二本松市史』（第六巻近世Ⅲ資料編四、1982年）
③「奉奏上歎願之事（宗吾神霊口宮大明神歎願）」（嘉永5年8月、個人蔵）
④白川部達夫「幕末維新期の村方騒動と「小賢しき」者」（『近世の村と民衆運動』塙書房、2019年）
⑤平沢清人『百姓一揆の展開』（校倉書房、1972年）、

林進一郎「義民をめぐる地域社会の相克—安政六年信州南山一揆の歴史的位置—」（『信濃』64-2、2012年）
⑥八郷友広「信大目安」と高梨架右衛門物語」（『近世民衆の教育と政治参加』校倉書房、2001年）
⑦『岩手の百姓一揆集』（北上市史刊行会、1976年）
⑧高木明「祝詞に見る高崎五万石騒動」（『月刊上州路郷土文化誌』210～212、1991年）
⑨『大野誌』（平塚市教育委員会、1958年）、伊藤俊介「芝居に描かれた真土村事件」（『アジア民衆史研究』25、2020年）をもとに作成

響し合った、義民・惣五郎像の形成・展開があったのである。

おわりに

本稿では、千葉経済大学地域経済博物館令和四年度特別展「房総義民伝―義民はいかに語られ、人びとの力になったのか―」の作成にあたって収集・発掘した史料や個別事象をもとに、代表的な「義民」として知られる「佐倉惣五郎」を取り上げ、近世後期における義民像の形成・展開過程と社会的な影響について若干の検討を行ってきた。

近世後期における佐倉惣五郎像の形成と展開について、本稿での検討によって明らかになったことは次の通りである。繰り返しになるが、改めて振り返ってみたい。一八世紀前半には、堀田正信の時代に惣五郎が処罰され堀田家を祟ったという怨霊伝承が佐倉藩領内に存在していた。この伝承の存在を背景に、堀田家の佐倉藩への再入封という出来事が契機となつて、一八世紀半ば、堀田正亮が惣五郎を口ノ明神に祀ったとの認識が江戸の文化人によって記され、当地では佐倉藩・地域の寺院・民衆が関与して口ノ明神の祭祀が始められた。こうした祭祀をめぐる動きと併せて、一八世紀半ばには惣五郎の一揆を描く物語本が成立し、これを以て初めて具体的な言動を伴った惣五郎の姿が描出され、人びとに受容されるようになった。

一九世紀前半の文化・文政期には、物語本は写本として流布し、『地藏堂通夜物語』は佐倉藩領内、『堀田騒動記』は領外の関東周辺地域へと広まった。貸本屋や出版物による流布も確認され、近世の書物・出版文化が惣五郎像の形成・展開に寄与した部分は大い。一方、惣五郎を祀った口ノ明神や墓所も文化・文政期から繁栄をみせ、次第に参詣者が増加し、地誌や紀行文にも取り上げられた。こうした信仰の高まりは物語本での叙述に変化をもたらし、惣五郎の祭祀は、怨霊を鎮めるための祭祀から大勢の人びとを救った功績を称えるための祭祀へと意味合いを変え、

幕末には、惣五郎には公事訴訟への利益があるとの認識が物語本に現れたのである。また、書物や信仰の広まりが基盤となって江戸で歌舞伎の題材とされ、市中はもちろん上総・下総の人びとを熱狂させた。歌舞伎はまた錦絵や版本を生み出し、さらには「義民」という概念までも生み出した。

以上のような惣五郎像の形成・展開が背景となって幕末維新期には実際に、公事訴訟の神様とされた「惣五郎」に祈願する人びとが現れた。惣五郎像は、百姓一揆や訴訟などによって現実の課題を解決しようとする幕末維新期の人びとの行動や思想を後押ししたのである。

このように、近世後期における義民像の形成・展開は、伝承、書物・出版、祭祀・信仰、芸能といったさまざまな媒体によってなされていった。これらは、伝承が文字化され、それが歌舞伎の題材となった、というように単線的に義民像を形成するのではなく、各媒体が相互に影響し合いながらイメージを作り上げていったところに特徴がある。複数の媒体が結びついた人物像形成に関しては、たとえば神格化された武士についても同様の指摘がなされており⁽⁴⁶⁾、近世・近代における人物像・人物顕彰の政治・社会的意義を検討する上での重要な視点だといえる⁽⁴⁷⁾。また、多様な媒体という点と併せて、義民像の形成・展開に携わった地域内外のさまざまな主体も注目される。惣五郎像の形成・展開においては、書物を受容し参詣に訪れた佐倉藩領外の人びとをはじめ、怨霊伝説と堀田家による祭祀を記録した馬場文耕や『藤岡屋日記』の作者など、江戸の文化人が小さくない役割を果たしていた。この点に関しては、一揆の指導者と目された人物について地域と江戸などの遠隔地とで異なる人物像が語られた事例が指摘されており⁽⁴⁸⁾、義民像形成における地域内外の人びとが果たした役割について、今後さらに検討を深めていく必要がある。

最後に、近世後期を通じて形作られた義民像は、明治期になり自由民権運動の流れの中で「理想的な国民像」として読み替えられた⁽⁴⁹⁾。その後、明治末から昭和初期にかけては「忠君愛国」の体制擁護者として読み替えられ、

「郷土愛」と「愛国心」を繋ぐ媒介として利用された⁽⁵⁰⁾。義民像は各時代の社会状況や課題に応じて人びとの行動や思想形成を促す存在であったといえる。また、以上の動きの中で明治期以降、日本各地で「義民」が見出され、房総三国には多くの「義民」が創出された【表1】。その所以については、「代表的義民である佐倉惣五郎を生み出した国、県として、地域住民や地元研究者に義民に対する関心が高」かったことが指摘されているが⁽⁵¹⁾、惣五郎像が房総の「義民」たちに与えた影響の具体的な解明は今後の課題としたい。

註

- (1) 保取智「義民の年次的・地域的考察」(同『百姓一揆と義民の研究』吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (2) 個々の「義民」の事蹟や供養・顕彰活動、房総の「義民」の全体的な特徴や傾向については、別稿に譲りたい。
- (3) 保取智「越訴と義民物語―百姓一揆の虚像と実像―」(註(1) 保坂二〇〇六年)。
- (4) 深谷克己『増補改訂版「百姓一揆の歴史の構造」』(校倉書房、一九八六年)。
- (5) 若尾政希『百姓一揆』(岩波書店、二〇一八年)、同「百姓一揆から何が見えるのか」(『歴史地理教育』九二九、二〇二一年)。
- (6) 八鍬友広『近世民衆の教育と政治参加』(校倉書房、二〇〇一年)、同「闘いを記憶する百姓たち」(吉川弘文館、二〇一七年)。
- (7) 惣五郎に関しては、児玉幸多『佐倉惣五郎』(吉川弘文館、一九五八年)、檀谷健蔵『佐倉藩政史要』(千葉県立佐倉第二高等学校社会科研究室、一九五八年)、大野政治『地蔵堂通夜物語―佐倉惣五郎一代記―』(命書房、一九七八年)、青柳嘉忠『研究史佐倉惣五郎』(佐倉市文化財保護協会、一九八一年)、横山十四男『義民伝承の研究』(三一書房、一九八五年)、楠木行廣『佐倉惣五郎と宗吾信仰』(命書房出版、一九九八年)、滝口昭二『惣五郎はいかに語られたか』(滝口昭二、二〇二二年)、『千葉県の歴史』通史編近世? (千葉県、二〇〇八年)を参照。
- (8) 『改訂房総叢書』第二輯(改訂房総叢書刊行会、一九五九年)。

- (9) 宮田登『生き神信仰』(塙書房、一九七〇年)。
- (10) 『寛政重修諸家譜』第十(統群書類従完成会、一九六五年)。
- (11) 『房総叢書』第二輯(房総叢書刊行会、一九一四年)。
- (12) 原田伴彦ほか編『日本庶民生活史料集成』第八卷(三二書房、一九六九年)、『佐倉市史料叢書 古今佐倉真佐子』(佐倉市史編さん委員会・佐倉市、二〇一七年)。
- (13) 岡田哲校訂『馬場文耕集』(国書刊行会、一九八七年)。
- (14) 佐倉藩の史料では、「天保校訂紀氏雜録十二」(『佐倉藩紀氏雜録』千葉県、一九八四年)、平野重久「佐倉藩雜史第一」(『佐倉藩雜史』佐倉市、一九八一年)に同様の記述がみられる。
- (15) 「御建立修覆之節者、前々佐倉御地頭様を被遊来りし」とある。『大佐倉村指出帳』(宝永六年)、宝珠院文書六。
- (16) 『年寄部屋日記書抜七 自宝暦元歲至同十三年』(宝暦二年八月朔日)、マイクロフィルム版堀田家文書六一―二二五。
- (17) 註(16) 『年寄部屋日記書抜七 自宝暦元歲至同十三年』(宝暦二年十月廿三日)。
- (18) 物語本の系統付けに関しては、萩原大地「佐倉惣五郎物」実録の系譜―『佐倉花実物語』の位置づけをめぐる―(『近世文藝』一〇七、二〇一八年)。
- (19) 『地蔵堂通夜物語』(文政五年筆写)、宗吾靈堂・靈宝殿所蔵。
- (20) 下総国印旛郡下方村(現成田市)・円城寺彦兵衛筆写、成田山靈光館にてコピーを所蔵。
- (21) 宗吾靈堂・御一代記館所蔵。
- (22) 上総国武射郡森村(現千葉県山武市)・土屋久蔵筆写、千葉県文書館・茂原市緑町加藤家文書エ三八。目録上は『地蔵堂通夜物語』となっているが、内容により『堀田騒動記』であると判断した。
- (23) 註(7) 青柳一九八一年。
- (24) 註(19) 『地蔵堂通夜物語』。

- (25) 鈴木凜「近世後期における「義民物語」の伝播・受容―「佐倉惣五郎」を事例に―」（『書物・出版と社会変容』二五、二〇二〇年）。
- (26) 『堀田騒動実録』乾・坤（京都大学附属図書館所蔵）。
- (27) 長門国西豊浦郡宇賀本郷村（現山口県下関市）の村医者・古谷道庵の日記には、万延二年（一八六一）、「佐倉惣五郎」の読み聞かせを行ったことが記され、幕末には本州の最西端にまで惣五郎の物語が流布していたことが指摘されている。註
- (5) 若尾二〇一八年。
- (28) 若尾政希『太平記読み』の時代（平凡社、一九九九年）、横田冬彦『日本近世書物文化史の研究』（岩波書店、二〇一八年）等。
- (29) 信濃国伊那郡南条村（現長野県飯田市）浜島家の蔵書目録では「佐倉惣五郎物語」の隣に「公事訴訟取捌御定書」が記載され、公事訴訟に関する諸判例と照合しながら「佐倉惣五郎物語」を読んだ可能性が指摘されている。林進一郎「近世後期信濃国の蔵書にみる「惣五郎物語」の読者たち―長野県飯田市浜島家文書「本出入寄帳」から―」（『国史館史学』二二、二〇〇八年）。
- (30) 下総国香取郡万力村（現千葉県旭市）の百姓・金杉貞俊は、惣五郎の物語本を筆写し、「願書之趣、いかにもじんちやうにして世の常の人の認めにも非ず」と述べている。『佐倉宗五聞訴平安録卷之式書拔』金杉佐久治家文書G―二一六。
- (31) 朝倉治彦編『遊歴雜記初編』一（平凡社、一九八九年）。
- (32) 『年寄部屋日記』（文化三年正月晦日）、マイクロフィルム版堀田家文書六―一八〇。
- (33) 植木直一郎『義人宗吾伝』（宗吾堂、一九五二年）。
- (34) 早稲田大学図書館古典籍総合データベースにて閲覧。『下総国旧事考』（弘化二年）や『利根川図志』（安政二年）にも取り上げられている。
- (35) 『成田市史』中世・近世編（成田市、一九八六年）。
- (36) 『佐倉宗五郎物語』（天保八年筆写）、架蔵。
- (37) 『佐倉騒動実録』（弘化二年筆写）、金杉佐久治家文書F―三―七。
- (38) 『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第四卷（三―書房、一九八八年）。

- (39) 註(7) 大野一九七八年。
- (40) 註(37) 『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第四卷。
- (41) 註(1) 保坂二〇〇六年。
- (42) 註(5) 若尾二〇一八年。
- (43) 嵐圭史・小池章太郎・高橋敏『佐倉義民伝の世界』(歴史民俗博物館振興会、二〇〇〇年)。
- (44) 平沢清人『百姓一揆の展開』(校倉書房、一九七二年)、林進一郎「義民をめぐる地域社会の相克―安政六年信州南山一揆の歴史的位置―」(『信濃』六四―二、二〇一二年)。
- (45) 本史料は、註(7) 檀谷一九五八年、青柳一九八二年でも取り上げられている。
- (46) 高野信治『神になった武士』(吉川弘文館、二〇一二年)。
- (47) 『特集』一九世紀日本の人物顕彰』(『歴史評論』八四八、二〇一〇年)。
- (48) 水村曉人「菅野八郎頭取説に関する一考察―『信達騒動記』をてがかりに―」(須田努編『逸脱する百姓』東京堂出版、二〇一〇年)。
- (49) 明治期の義民に関する研究としては、金井隆典「日本近代成立期における義民の「発見」と「主体」の形成」(『人民の歴史学』一五八、二〇〇三年)、新井勝紘「義民と民権のフォークロア」(同編『近代移行期の民衆像』青木書店、二〇〇〇年)等。
- (50) 見城徳治「近代日本における〈義民〉観の相克」(『日本思想史研究会会報』一八、二〇〇〇年)。
- (51) 註(1) 保坂「義民の年次的・地域的考察」。

【付記】 展示資料の借用にあたっては、宗吾霊堂、船橋市西図書館、藤崎淳様・恭子様、行貝治雄様にお世話に

なりました。心より感謝申し上げます。

(すずき りん 地域経済博物館学芸員)

令和4年度特別展「房総義民伝－義民はいかに語られ、人びとの力になったのか－」展示資料一覧

トピック	資料名	年代	所蔵先
万石騒動 三百年祭	万石騒動安房三義民三百回忌法要(写真)	平成22年	館山市 行貝治雄氏提供
	万石騒動安房三義民三百年祭記念式典(写真)	平成22年	館山市 行貝治雄氏提供
	館山市指定史跡 三義民墓(写真)		館山市国分 国分寺
江戸時代の百姓一揆と義民	徒党強訴逃散禁止令高札	明和7年	当館蔵
	百姓一揆の出生・得物(パネル)	安政5年	『佐倉宗五郎一代記』より
房総の義民たち	内海仁右衛門 供養大仏・墓(写真)		船橋市本町 不動院
	篠崎庄八 顕彰碑(写真)		千葉県村田町 神明神社
	池田三郎左衛門 顕彰碑(写真)		木更津市田川 神明神社
	石毛三郎左衛門 顕彰碑(写真)		旭市二(太田) 墓地
	森内威之助・吉野四郎右衛門 祠(写真)		いすみ市中原 玉崎神社
	最首奈右衛門 墓(写真)		いすみ市新田 坂水寺
	房総の義民一覧(パネル)		
佐倉惣五郎とは	宗吾様御着用の袴	近世前期 ^カ	宗吾霊堂所蔵
	承応年間の名寄帳(写真)	承応年間	宗吾霊堂所蔵
	宗吾霊像		個人蔵
義民化のはじまり	佐倉宗吾郎像		個人蔵
	地蔵堂通夜物語	文政5年	宗吾霊堂所蔵
	宗五記	宝暦4年	宗吾霊堂所蔵
	堀田騒動記	嘉永6年	個人蔵
	現在の口ノ明神(写真)		佐倉市大佐倉 将門口ノ宮神社
物語本の広まり	将門山の図(パネル)	安政5年	『成田名所図会』より
	堀田騒動記	文政9年	個人蔵
	佐倉花実物語	安政2年	個人蔵
	佐倉宗五郎一代記	安政5年	個人蔵
信仰の広まり	貸本屋(パネル)		長友千代治『近世貸本屋の研究』
	下総国櫻惣五郎神社諸願成就札	幕末-明治期 ^カ	個人蔵
	宗吾霊墓石の碎片	近世	宗吾霊堂所蔵
	下総国宗吾霊堂境内図	明治27年	個人蔵
	宗吾大神の祠(写真)		南房総市中 駒形神社
	現在の宗吾霊堂(写真)		成田市宗吾 宗吾霊堂
幕末維新期の民衆運動と惣五郎	宗吾祠の図(パネル)	安政5年	『成田名所図会』より
	奉奏上敷願之事	嘉永5年	佐倉市 藤崎家所蔵
自由民権運動と義民	惣五郎が影響を与えた幕末維新期の民衆運動(パネル)		
	東洋民権百家伝	明治16~17年	個人蔵
	佐倉宗吾霊神真伝大縁起	明治27年	個人蔵
	福澤諭吉(写真)		
郷土愛と愛な 園心をつなぐ義民	田中正造(写真)		
	佐倉宗吾子別れ組上三枚続き(複製)	明治42年	個人蔵
	安房三義民伝	昭和3年	個人蔵
歌舞伎の題材化	祈願書	昭和10年	宗吾霊堂
	館野小学校校歌(写真)	大正7年	館山市立館野小学校
	歌川芳幾「浅倉物語十二段続之図」	安政3年	船橋市西図書館所蔵
	歌川国芳「朝倉当吾直訴の図」	嘉永4年	船橋市西図書館所蔵
	三代歌川豊国「朝倉当吾直訴の図」	文久元年	船橋市西図書館所蔵
	歌川国芳「当吾亡霊の図」	嘉永4年	船橋市西図書館所蔵
	歌川国芳「小椋当吾幽霊の図」	嘉永4年	船橋市西図書館所蔵
	歌川国芳「浅倉当吾渡し守甚平の図」	嘉永4年	船橋市西図書館所蔵
	三代歌川豊国「佐倉当吾(市川小團次)女房お岑の図(尾上菊次郎)」	文久元年	船橋市西図書館所蔵
	二代歌川芳宗「撰書六六談 義心の錠」	明治25年	船橋市西図書館所蔵
	三代歌川豊国「浅倉当吾別れの図」	文久元年	船橋市西図書館所蔵
	三代歌川豊国「浅倉当吾と渡し守甚平」	嘉永4年	船橋市西図書館所蔵
	月岡芳年「佐倉宗吾之話」	明治18年	船橋市西図書館所蔵
帝国劇場三月興行(佐倉義民伝)吉右衛門の宗五郎(絵葉書)	昭初期	個人蔵	
昭和十二年二月興行大歌舞伎	昭和12年	個人蔵	
中村吉右衛門一行記念参拝(写真)	平成10年	宗吾霊堂所蔵	
歌舞伎座百二十年十二月大歌舞伎	平成20年	宗吾霊堂所蔵	
前進座五月国立劇場公演 佐倉義民伝	令和元年	宗吾霊堂所蔵	
前進座佐倉義民伝チラシ	令和元年	個人蔵	